

孝女曹娥碑

東晋・昇平2年  
(358年)

魏晋唐小楷③

木 兼

木 雜 室

伊 藤 滋



「孝女曹娥碑」は、後漢末に溺死した父を捜して川に身を投げ、父の屍を求めた孝行娘・曹娥をたたえた文章である。王羲之の楷書の一とされる。巻末に昇平二年八月十五日の年号が刻されている。古い墨跡の模写本も伝来するが、法帖に刻され拓本として伝わるものの方が書風が優れている。左に示したのは巻頭部分である。全体は二十七行からなる。前号の「黃庭經」と比較すると文字の構成は、だいぶ異なる。字形は、やや扁平で上部は広く、下部は締まり、逆三角形の趣を示している。魏の鍾繇の『薦季直表』(一日号所収)の文字構成に通じるところがある。先人の著録にも古い趣があると言及されている。右頁には特徴ある字画の鮮明な文字を取り出した。横画や左右の払いは実に伸びやかで大胆であり、澄んだ筆勢である。

次号は、「樂毅論」です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

「昇平二年の刊記」



孝女曹娥碑



孝女曹娥者上虞曹盱之女也其先與周同祖末曹  
荒沈爰来適居盱能撫節安歌婆娑樂神以漢安  
平年五月時迎伍君逆濤而上為水所淹不得其屍  
時娥年十四號慕思盱哀吟澤畔旬有七日遂自投  
江死經立日抱父屍出以漢安迄于元嘉元年青龍  
在辛卯莫之有表度尚設祭之誄之辭曰

伊惟孝女孽孽之姿徧其近而令色孔佳窈窕潤  
女巧笑倩兮宜其家室在洽之陽待禮未施嚙喪  
蒼伊倚無父孰怙訴神告哀赴江永號視死如歸

# 書道芸術院

## 平成の群像 (2010)



31×25cm

### 嵯峨大拙



前衛書の生みの苦しみは大変である。常に新しいものへの挑戦という精神で作品を創作していかなければならぬ。

私の作品に共通して言える事は、常に余白を意識して制作する事である。

また、私が信じてやまないことは「人間は、必ずしも感じる力を持つてゐる。感は物事に接する事で発し、感動する場に遭遇して動く。」この感性を研ぐ機会（場）を自ら求めることが大切である。「森羅万象・ごごとく我が師匠なり」非常に意味深い言葉であり私の座右の銘である。

携帯電話、パソコン全盛期の今、クリック、範囲指

定して網かけする第一のヒント。金文、篆書類の拓本を見る第二のヒント。この二つのヒントから文字を重ね合わせ造形化し制作した。文房四宝の硯は鋒鉢の細かい瑞々しい雨烟硯を使用し30年ほどねかせた固形墨を磨り静置して沈殿した煤の部分だけを使用した。その理由は混合して使用すると紙上に滲み出る酸化した茶色の膠の後が気に入る為である。それを防止する紙の選別が必要になる。特殊な粉末を混入させた手漉きの紙を使用した。また煤を活性化させる為70～80%のエチルアルコールに浸して洗淨ろ過して調整して紙との融合を計った。何故、墨にこだわるのか、作品には常に古雅の彩を目ざしている。生れたばかりの墨は生氣はあるが深淵な趣が感じられないものである。

筆は今回の作品を表現するには駿筆（馬の腹毛）が一番適していると考えた。柔らかく腰のない毛で作られた筆である。作品の出来映えがどうであろうと、作品は自分の心象風景であり生きざまである。セザンヌは「我々の仕事は過去の人々の業績の範囲内にとどまるのであってはならない。それ等過去の業績の鎖にせめて一環を加えることでなければならない。」と言つている。前衛書に限らず、新しい世界へのチャレンジ、そしてアイデンティティーを確立していくことだと考へる。

# 書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

今月

より定年により三月末をもつて理事長を退任され、初代の財団法人書道芸術院会長に就任された恩地春洋

先生と交替して本欄を担当することになりました。院を取り巻く書道界を中心とした最新情報を広汎に、また的確に取り上げて提供された恩地春洋先生には及びもつかませんが、院理事長という重責を任せられた以上、逃げる訳にはいきません。微力ながら精一杯努力してまいりたいと思いますので、恩地先生同様ご支援、ご協力を願い申し上げます。

平成22年度

## 書道芸術院の事業計画 —理事改選による財団人事—

3月14日の財団評議員会、および理事会において、平成22年度事業計画、収支予算、任期満了に伴う理事改選、評議員補充、新理事予定者による臨時理事会により財団理事長、常務理事の互選、退任理事の会長、顧問への推戴などが決定したので以下報告します。

都美改修中のため64回、65回展は3会場での分散展示。

作品搬入受付は一般公募から審査会員まで全て未表装（マクリ）で、鑑別審査、特別賞選考も全て12月中旬に未表装のまま行われる。

作品搬入 平成22年11月29日

A 中央展（本展） 23年2月1～6日

会場 東京セントラル美術館

陳列作品 財団役員（参考以上）、院常任総務、峰雲賞、同候補 大賞・準大賞・白雪紅梅賞

B 西日本展 23年2月23～27日

会場 奈良県文化会館

陳列作品 財団役員（参考以上）、峰雲賞、大賞・準大賞・白雪紅梅賞

会場 関西・甲信越・北陸・山陰・山陽・四国・九州各総支局の全作品（一般公募入選は除く）

C 東日本展 23年4月2～6日

会場 仙台メディアテーク

陳列作品 財団役員（参考以上）、峰雲賞、大賞・準大賞・白雪紅梅賞

会場 関東・東京各総支局の全作品（一般公募入選は除く）

表彰式、研究会 23年2月5日

会場 帝国ホテル 13時から

祝賀会 同日同ホテル 16時～

〔平成22年度事業計画〕

1 第64回書道芸術院展

2 書道芸術院秋季展

会期 22年10月5～10日

会場 東京セントラル美術館

出品者 A 名誉顧問・常任顧問

B 財団役員他

C 審査会員選抜作家

D 審査会員候補（公募）

作品締切 22年8月10日

第62回全国学生書道展

都美改修に伴い本年は奈良で開催

会期 22年7月28～8月1日

会場 奈良県文化会館

出品締切 22年6月8日

書き初め誌上展 昨年通り実施

書道芸術院講習会（単位認定）

期日 22年8月21～22日

会場 高知市文化プラザ

主管 四国支局

講演会 22年11月23日 14時

会場 上野 精養軒

講師 未定

① 退任する理事

恩地春洋（定年）財団会長に推薦

浜谷芳仙 財団名誉顧問に

尾形鼎山・黒川江偉子・木村船翠 財団常任顧問に

大平鉄男 財団参事に

② 新理事（任期2年間）

理事長 辻元大雲（新）

常務理事 大野祥雲（再）

小竹石雲（新）、下谷洋子（新）  
理事 飯高和子・板垣洞仙・小伏小  
扇・小林琴水（新）・小浜大明（新）  
・齋藤雨城（新）・嵯峨大拙・砂本  
杏花・滝春芳・西林乘宣・宮澤梅径

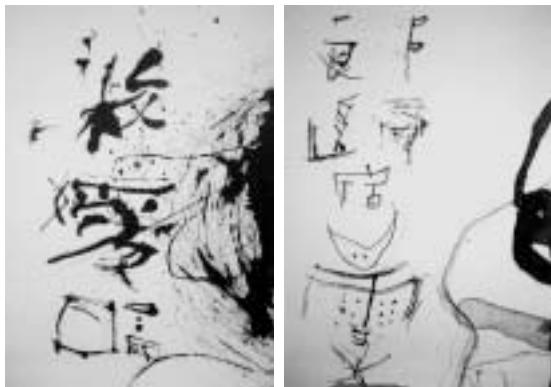
（任期は残任期間）  
③ 补充された新評議員  
A 石田春窓・熊谷宗苑・佐藤無極・田  
守光昭・平川峰子・山口仙草  
④ 任期満了による顧問などの再任  
名譽顧問 柚口青萍・村野大仙  
常任顧問 水谷鶴村・山下皓映  
参考 尾崎栄巖  
⑤ 総支局長交代人事  
東京総局長 滝 春芳  
北陸支局長 津田和秋



理事会会場風景

## 現代詩文書（一）

坂本素雪



中国の画家「石虎」の字



その影響を受けた作風

私は、一から筆を執って教えてくれた師匠がない。よって人一倍勉強しなければならなかつたが、しかしその勉強の方法すらわからなかつた。もんとしながらも地方の書会が主催する書展に自ら「小字作品」小画仙全紙を背負い会場に搬入した事があった。結果、この作品を審査出来る先生方がいらないとの事で搬入を断られた。この時、書の部門制に疑問を持つたが、組織というものを知つた。

その後、中学の恩師、高橋素光氏の

勧めで手島右卿氏の独立書人団へ入会。また、地方の書道会である北門書道会、東奥書道会、そして宮城野書人会といろいろな作風との出会いがあった。

古典を学び、古典の理法を現代に蘇生させ自分の作風を創造する。しかし

それだけでは、新しいものは生まれない。出会いを契機と捉え新しい内容と新しい形式を創造していくかな

ければならない。今の師、小野寺逢仙氏との出会いは、師

の芸術に関する幅広い見識と、自由奔放に自己表現を認めてくれている懐の広さにより構築されている。芸術は締め付けや制限をするものではない。作品は2004年、中国で出会った画家、「石虎」との出会いから生まれた。

## 21世紀の書 —私の主張—

### 前衛書（一）

平岡千香子

#### 前衛書の魔力

今回より6回にわたり、このコーナーを担当させていただくことになりました。私にとっては過大な仕事が回ってきたことへの困惑と同時に一筋の光明でもあります。

この機会を与えてくださいましたことに感謝し、ここまで歩んでまいりました私の前衛書に対する考え方を思いのままに書き進めてまいります。



第61回書道芸術院展  
峰雲賞受賞 平岡千香子書

峰雲賞 受賞。

まさに、前衛書は、突如として、人知を超えた大きな力で冥加の作に峰雲賞受賞という魔物がやってきて感激しているところに、届いた「峰雲賞」おめでとう、院史に残る快挙！浜谷芳仙先生からの祝詞。時間が経つにつれ、事の重大さに押しつぶされそうになりました。現在も不安と懊惱のまっただ中にいます。

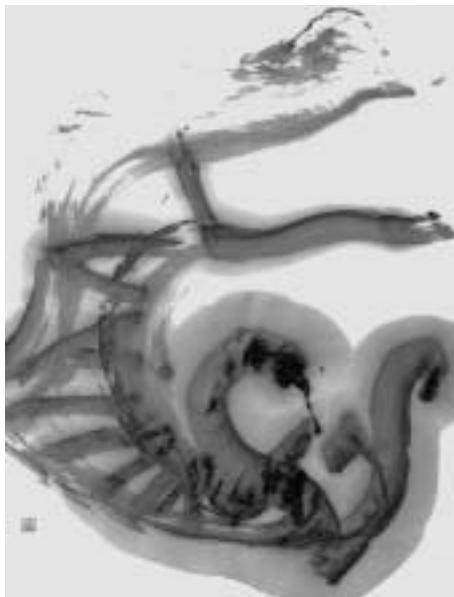
「冥加」の作がまさかの

第61回書道芸術院展に出品した「冥加」＝知らず知らずのうちに神仏の加護をいただいており、これは、父が亡くなつた時の感動を温めいた心象表現の作である。父は日曜日に他界。母と長男（主人）に見守られて静かに旅立つたのです。私は父の最期の様相に強く打たれました。

## 峰雲賞

漢字部  
川島舟錦

山の小さな小学校で「お習字をしませんか」と声をかけ放課後ご指導下さいました先生から、このたびのことでお電話をいただきました。うれしい出来事でした。



川島舟錦

## 第63回書道芸術院展

## 書道芸術院大賞

かな部  
坂口とし子

思いがけず、栄えある書道芸術院大賞をいただきまして、心より御礼申しあげます。

これは、書道芸術院の先生方、直接ご指導いただきております下谷洋子先生、書景会の皆様、と多くの方々の、ご厚情に支えられていただいたものであることを、改めて深く感じ、感謝の念でいっぱいです。

書に出会いましてから、遅々として上達しないのが、もどかしく思われる時もありましたが、「書は時間かけて育つもの……」というお言葉を頼みに、私のどこかで、少しずつでも育つているかも知れないという思いで参りました。この度の感激は正に夢のようです。これからも焦らず、少しずつでも前進出来るよう勉強していきたいと思いまます。よろしくご指導をお願い申しあげます。

坂口とし子

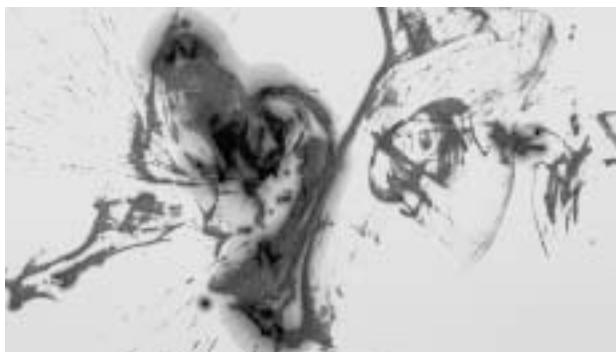


&lt;1&gt;

書道芸術院準大賞



漢字部 西川藤象



前衛書部 米倉聲香



篆刻・刻字部  
丸山筑峰

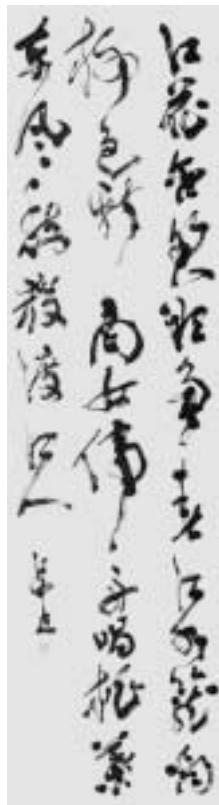


現代詩文書部  
菊田杏仙



漢字部 藤井龍仙

漢字部  
三木江竹



漢字部  
益子翠蘭



白雪紅梅賞



現代詩文書部 玉井瑤鼎



前衛書部 佐藤華炎



現代詩文書部 池田沙静



漢字部  
伊藤稜雲

白雪紅梅賞



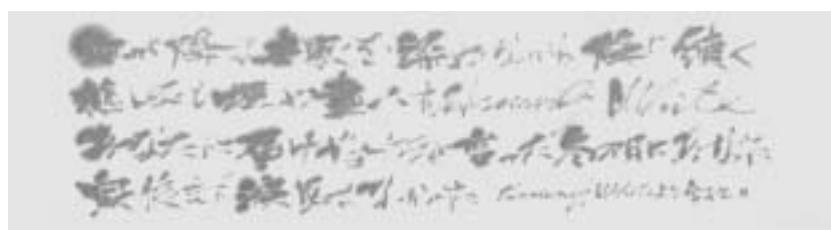
現代詩文書部 氏家久光



漢字部  
大野輝風



前衛書部 一條紅蕭



現代詩文書部 米田智子

## 無鑑査に対する賞

### 院賞

#### ・漢字部

一森映泉 小松由琴 正木美奈子  
目良珠山 森田藤谷 山崎絹恵

#### ・かな部

斎藤万里

#### ・現代詩文書部

朝倉爽陽 伊藤美相 神田典子  
菅原浪花

#### ・篆刻・刻字部

市瀬洋

#### ・前衛書部

後藤歩 高橋沙緒理 中島祥晃  
春日明藤

#### ・毎日新聞社賞

伊藤則子

#### ・漢字部

乙倉翠芳

#### ・現代詩文書部

安藤楊風

#### ・篆刻・刻字部

成田能喜

#### ・前衛書部

伊藤秀江

#### ・漢字部

旭 筝陽

#### ・特選

一森亞耶奈

安達恵月 新井裕美子

石川淑蘭 板橋雅邦

岩谷梢月

中野春石

松永弘洋

遊佐友仙

遊佐柏葉

遊佐・刻字部

坂下雄城

馬場武志

荒谷明美

江口文江

栗原りか

上木京子 梅木篁山 尾池赤紅  
大下恵木 大槻美智子 岡居清真  
小椋佳翠 加藤雅芳 君島春翠  
小池稔子 小澤綾草 小白方秋園

斎藤江彩 坂田旬子 佐藤淳柳  
佐藤翠毬 澤田征乃 杉田幸春  
鈴木葉香 平 京子 高岡希水

高津谷麗 戸田柏葉 田中美泉  
宮脇窓梢 山田小東 吉岡裕水  
林 清水 宮内耕雲 宮本絹子

山賀風 村上和美 山田賀風  
渡辺澄子 吉岡裕水 吉澤澄水  
新谷鳳泉 岡部知江 京 絹子

五代久美子 飯島理恵子 伊藤葉月  
田中耶衣 長井順子 藤井如清  
松本泰子

遠藤誠子 清水海雪 神保繪梨香  
井澤直美 八馬天峰 林 静子 池谷玲奈  
森下祥泉 山本桂子 和久井小菊

遠藤誠子 小野里高堂 柴 正徳  
井上由唯 薄井華千 千葉敏代

青木啓子 池 美恵子 池谷玲奈  
比田加代子 井上由唯 薄井華千

森下祥泉 山本桂子 和久井小菊  
遠藤誠子 小野里高堂 柴 正徳

遠藤誠子 小野里高堂 柴 正徳  
井澤直美 井上由唯 薄井華千

・前衛書部  
板垣宏治 大町菜円 大村直子  
小野寺貞子 片 幸子 金川真紀子  
澤野美代子 佐藤友恵 佐藤右琴  
佐藤竹星 佐藤友恵 佐藤右琴  
佐々木紅楓 佐藤静子

高橋恵房 高原梨秀 富沢美紀  
中澤雅子 廣瀬幸枝 星野成美  
米谷惠琇

坂本覺山 佐々木紅楓 佐藤静子  
坂本覺山 佐々木紅楓 佐藤静子  
坂本覺山 佐々木紅楓 佐藤静子

高橋恵房 高原梨秀 富沢美紀  
中澤雅子 廣瀬幸枝 星野成美  
米谷惠琇

後藤美希 齋藤友香里 須田真知子  
千葉 永 寺内智子 西村佳子  
藤崎桜花 邊見芳紅



《一般・無鑑査》各部 審査風景



用紙 半紙普通判  
左の法帖の中から何文字臨書してもよい。

(掲載部分以外は不可)

〈解説〉北魏・太和22年(488年)。大きさ78×41×5cm、全9行、一行18字。古陽洞北壁最上層、牛欄造像記のすぐ上方の仏龕に刻された碑形の銘。孝文帝の異母弟にあたる北海王元詳が生母高氏の発願により弥勒像一軀を造営し、一門の繁栄を願ったことを記している。

(編集部)

以資孝之心。戈  
言奉涙。其日太  
妃還家。伊川立

※落款を必ず入れる  
署名、もしくは〇〇臨  
(押印のみ也可)



〈解説〉高野切第三種の書美を大きく形容す

ると明快端麗であり、きわめて单纯化された  
字形、大胆な変化のない運筆、明るい全体感  
などが大きな特徴としてあげられる。高野切

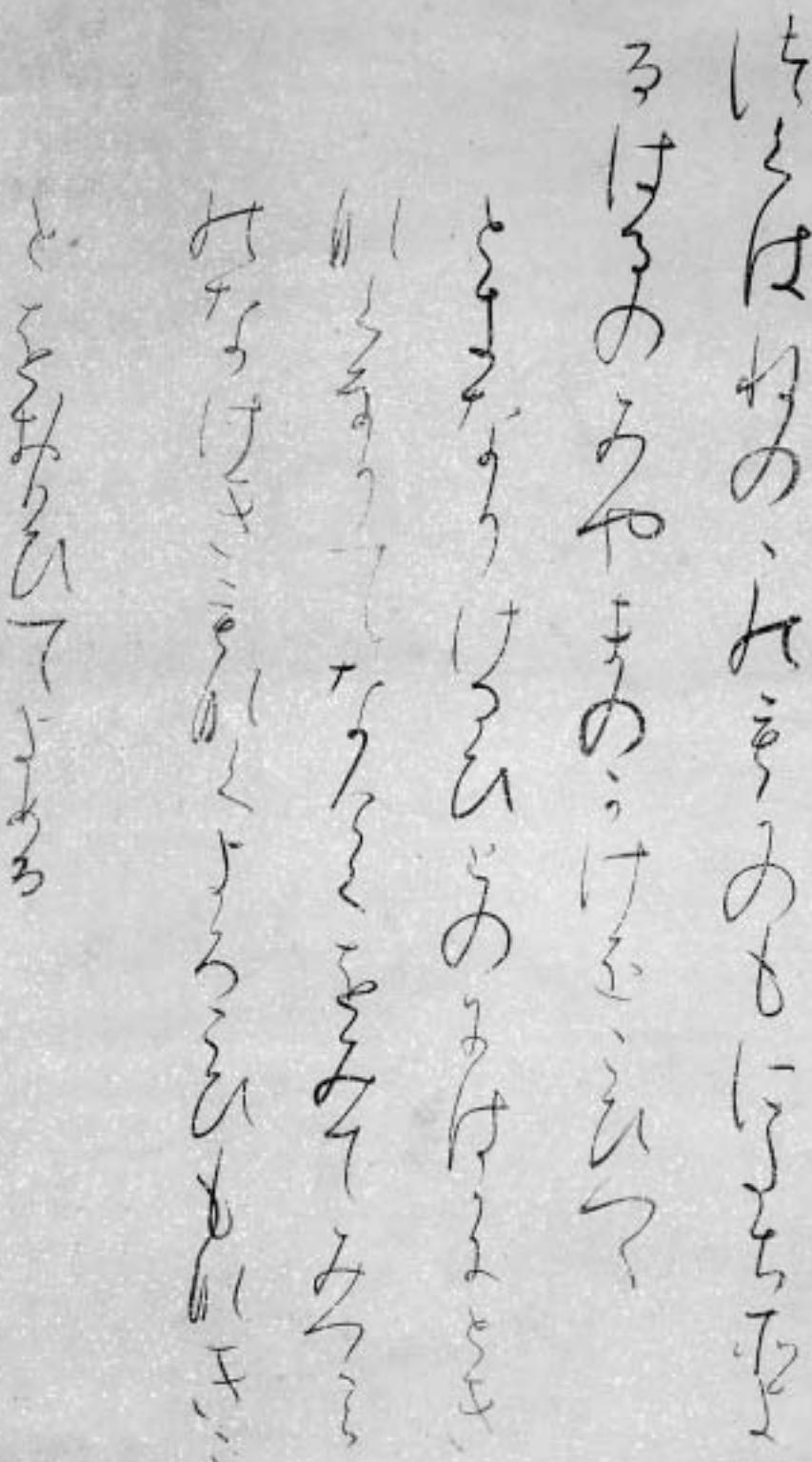
の三種類の中では、最もモダンで爽快な清々  
しい作品である。

(編集部)

つくばねのこのもかのもにたちぞよ  
ときなりけるひとの、にはかにとき  
なくなりてなげくみて、みづから

のなげきもなくよろこびもなき  
とをおもひてよめる

（能毛那久奈介久）



※落款を必ず入れる。  
○○臨(押印のみも可)

(86%縮小)

※上記の掲載歌一首以上を書く  
用紙・半紙普通判(料紙可)

習い方解説 (一)

濱田尚川

景気和暢 (景気和暢) 王維

限りなきすずしき風



書の基本は線であることを土台に学ばなければならない。今月は薦季直表から学びたい。純朴で自然の妙。ゆつたりとふくらみを持たし、あたたかく伸びやかに運筆することが大切ですね。ふところを広く構えを大きく楽に筆を運んでみた。始筆をやわらかく入り、丸みのある線を…じっくり紙に入り込んでいく深い線になるよう工夫してほしい。接筆に留意し広さを大切に豊かな太さを加えることが大切です。硬くならないことです。

習い方解説 (一)

小川弘舟

鳥歌花舞（鳥歌い花舞う）  
鳥鳴き花が咲き乱れる春の形容。

今月から六回担当します。

楷書にもいろいろな種類があります。中国の代表的な古典を参考にしながら勉強して行きたいと思います。

今月は、北魏の摩崖碑（自然の崖に書かれた雄大な書）を参考にしました。鄭道昭の書が代表されます。その中でも一番親しみ勉強されているものは鄭文公下碑ではないでしょうか。直筆で藏峰（筆先を逆から入れ、鋒先が線の中を通る）でのびのびと大らかに運筆し、雄大な気持になって書いて下さい。



書体＝楷書

鳥歌花舞 よみ (鳥歌い花舞う)

習い方解説 (一)

下谷洋子

わか菜つむ今日に初子のあひぬ  
れば松にや人の心ひくらむ  
(山家集)

か

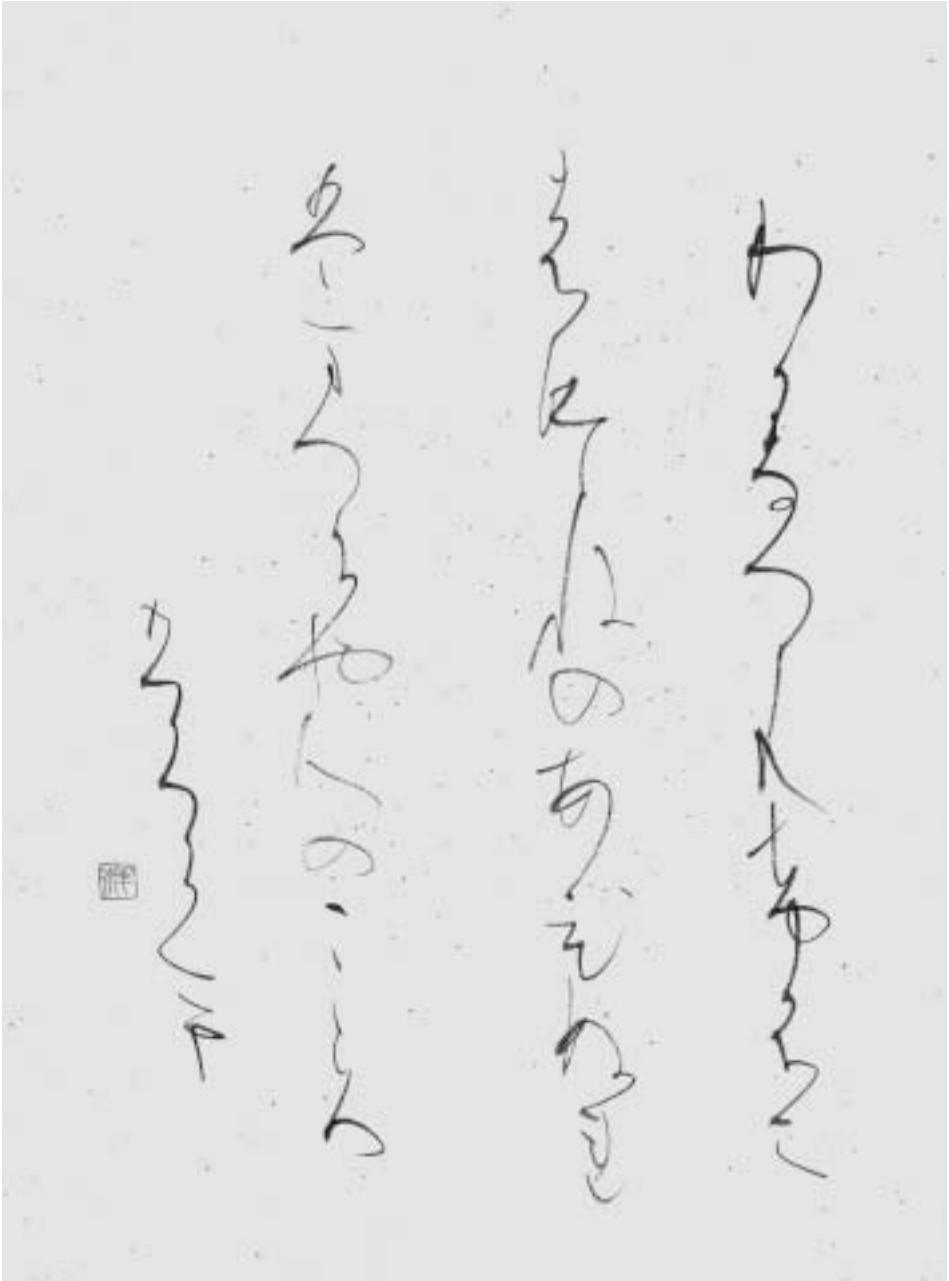
わ

か

な

な

か



創作

大意 若菜を摘む日である今日、  
子の日と重なったので、若菜を摘  
む一方、人々は待っていた子の日  
の小松を引くことに心ひかれるだ  
ろう。

よみ方 わか(可)な(奈)つむ(无)け(希)ふ(不)に(レ)は(者)つ(徒)ねのあひ(飛)ぬれ(連)ば(盤)  
ま(万)つに(尔)や人のこゝろひ(悲)く(久)らむ(牟)

かなの小字の学習法には、基本  
用筆や用字の練習から臨書へと進  
み、徐々に創作を体験していくの  
が一般的だと思います。自分で創作  
されるのは至難の業ですね。かな  
は特に、漢語を置き換えたり、変  
体がなの使い方、散らしはなど  
考える要素がたくさんあります。

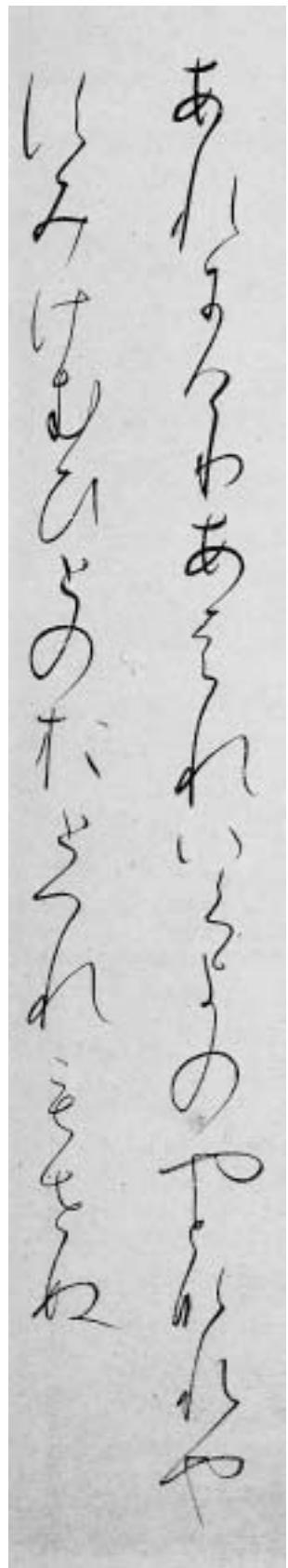
そこでまず、今回の参考手本のよ  
うな四行書き(三行と少し)の作  
品創りから始めることをお勧めし  
ます。ほぼ行間を同じにとり、三  
行は行の長さも同じにし、自然な  
文字の組み方が出来ることが目的  
です。字の大小、伸縮などが上下、  
左右で規則的にならず滑らかに流  
れること。かなを主としたほうが  
割りやすいです。

大意 若菜を摘む日である今日、  
子の日と重なったので、若菜を摘  
む一方、人々は待っていた子の日  
の小松を引くことに心ひかれるだ  
ろう。

かな規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$  (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種  
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あれに(尔)け(介)り(利)あは(者)れいく(久)よのやどな(那)れや  
す(須)みけむひとのお(於)とづれも(毛)せ(世)ぬ

### 習い方解説 (一)

奥田 瑞舟

かな条幅規定【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

奥田瑞舟選書

菜の花にかすみて小さき野の寺に  
春の涅槃の鐘うちしきる

(太田水穂)



よみ方 菜(な)の花(に)かす(霞)みて小さき(文)野の寺に

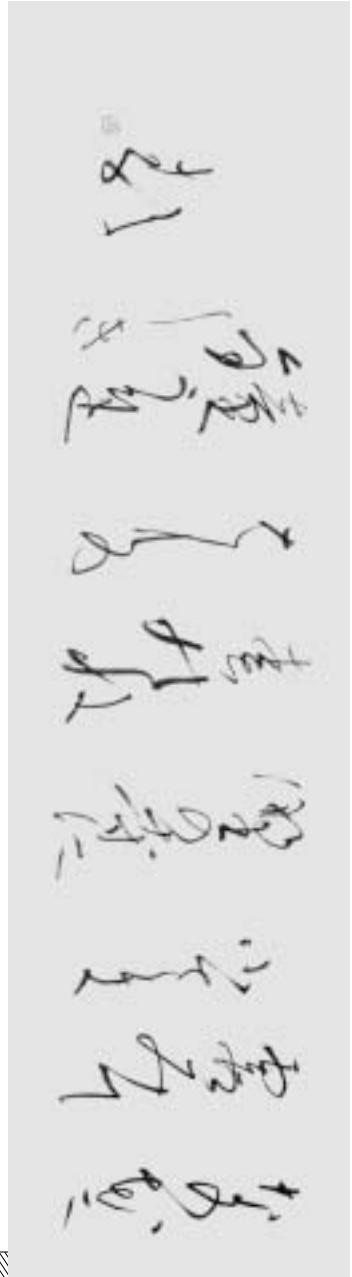
春の(能)涅(ね)槃(者)の鐘(うち)遅(遲)しきる(類)

創作



出品券  
貼付位置

\*より形式に限る



半切横書きで和歌を書くのは、繁雑になりやすいので、字粒に大小をつけ更に広い行と、細めの行を作りうるさくならないように工夫してください。

行は行頭が大切で、最終画から次の行の一画へ息が続くことで自然さができます。涅槃の表現を考えて、素敵な創作作品に仕上げてください。

漢字 条幅 規定 初段以上 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田 藤 扇 選書

### 習い方解説 (一)

半田 藤 扇

今回からの担当です。

条幅の一貫した流れの味わいを中心表現してみました。

リズミカルな運筆と渴筆が適度に生じれば、明るく快調な作となることだと思います。

そのねらいを踏まえて書いてみました。

羊毛筆の長峰を使用。



(盧亘)

書体=自由

漢字 条幅 規定 秀級以下 【五月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

吹田 紅扇 選書

### 習い方解説 (一)

吹田 紅扇

音楽・書・詩等芸術に関する字句

を選びました。六ヶ月間一行書を学びたく思います。最初は音楽を選びました。「音楽の演奏が春風に乗って流れてくる」との語です。楷書ですが、流れ良く書くようにしました。中鋒の兼毫筆を使用し

紅扇書



絲管醉春風  
(糸管は春風に酔う)

(唐李白「宮中行樂詞」)

書体=自由

ました。

楷書ですが、流れ良く書くようにしました。中鋒の兼毫筆を使用し

習い方解説 (一)

小伏小扇

なんと(セー〇年)立派な平城京

それからちよど一三〇〇年

一月から奈良の地で平城遷都

一三〇〇年祭「」が開催されます

ひととき、特集す 小扇書

今回から6回の実用文を担当させて頂くことになりました。

今、関西は「平城遷都一三〇〇年祭」の行事と話題で湧いています。キャラクターの「せんとくん」も次第に有名になってきました。そんな時、奈良に閑した文章がふさわしいと思い、課題にとり上げました。

つけペンを使用して線に連速、強弱のリズムをつけながら書いてみました。ペン先はスチーブンペンです。日本の文字を書くのに適しています。紙との摩擦感や鋭利な筆触は他に替え難いものがあります。ペン軸は木製が持ちやすく、軽いのが魅力です。最近はつけペンにもキャップが付いていて便利です。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

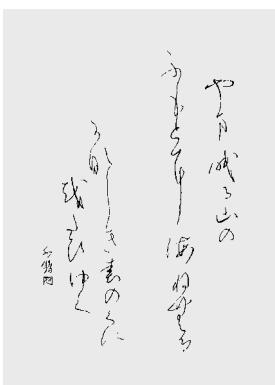
書体=自由

今月の

ホーリー作品  
各部総評

No. 586

かな部 師範 吉田 千鶴子  
線質や間の取り方などに少々未  
消化もあるが、大変よく考えた散  
らしで成功した。姿勢に期待！  
◎かな部総評 散らしの構成は、  
字の大小、行の長短、行間の広狭  
など古筆からの確かな收得が必要。  
不自然な作が多かった。（洋子評）



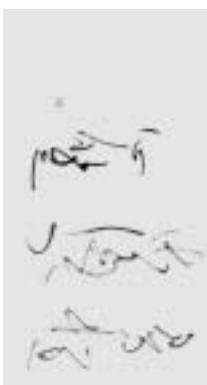
漢字条幅部 師範 小林 椿寿  
狼毫系の長鋒を使用して、リズ  
ム感よく大胆な行草表現。潤渴の  
変化と破筆の効果が生まる。  
◎漢字条幅部総評 全体に低調な  
感あり。創意工夫は普段の基礎学  
習の結果が現れる。参考例に頼り  
すぎず自らの表現を。（大雪評）



現代詩文書部 特選 菅原 白景  
長鋒筆による大きな構えで、濃  
墨と渴筆の線の強さが大胆に表現  
できました。白も生きています。  
◎現代詩文書部総評 表現の多彩  
は魅力的。線質と字形の研究も望  
みたい。（堂光評）



かな条幅部 師範 長井 順子  
横に大きく動きながら、行間が  
明るく軽やかにリズムがよい。渴  
筆の美しさは老練で抜群です。



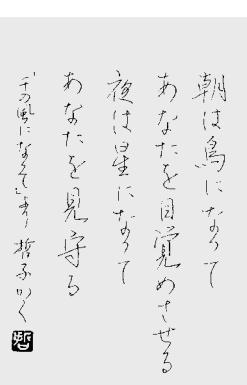
◎かな条幅部総評 創作の前に必  
ずテキストを十分に学ぶこと。誤  
字が防げます。又、かな作品は自  
分で墨をすること。（明子評）



前衛書部 特選 工藤 和香  
滲と濃墨の線が交り線と線が響  
き合いながら大きな動きで優美な  
作品でまとめ方もよい。  
◎前衛書部総評 バラエティーに  
とんだ力感溢れる作品等個性的で  
感情豊かな作見られた。（如水評）



ペン字部 師範 田玉 哲子  
じょうずを避けた簡素な筆致が目を  
引いた。澄み切った線と明るい余  
白、何よりも真摯な姿勢がよい。  
ものを選んだ方が筆意が明解にな  
ります。尚、掲載されるお手本は  
あくまでも参考です。（澄神評）



漢字部 師範 西川 藤象  
鋭利な刃物で捌く如く冴えを見  
せる作。小気味よいリズムが伝わ  
てくる。筆者の呼吸を感じさせる作。  
◎漢字部総評 筆意の現れた作は  
明確な表現意図に裏打ちされてい  
る作である。自信を持って書くに  
は普段の努力あるのみ。（春洋評）



## 今月の

特別研究品  
(特選)



51×171cm

前衛書  
(東峰) 亀井 健

一音靈

- ◆ 横への強い動き、判って生まれる飛沫、それが支配する余白は描いた部分と響き合って立体感を生む。音靈である。雅印が面白く楽しい。（明子評）
- ◆ 横の構成は力強さと一貫性を出しにくいが、右の渴筆と左側のにじみをうまく使って表現した。小味であるが墨色を研究すると大きさが出る。（葦之評）
- ◆ 左から右への展開は中央部の動きを伴って変化とリズムを生み出している。やや未整理な部分もあるが、躍動感がそれをカバーしている。（大雲評）

まれる飛  
いた部分

(游水) 荒川空華

## 「銀色夏生の詩」

—銀色夏生の詩—

◆大きな紙に余白を巧みにとり、見る者に思わずリズムを与えてくれる。筆のもつ違った面を表現され、全体を楽しく表現している。

(備予記)  
ように空間

◆ きれいな渴筆が霧のように空間にとけ込んで表情を見せる。強さもほしい気がするがそれではこの作をこわしてしまうかもしれない。  
(舊文評)

4月に入り新しい年度を迎える。何事においても新しいことに挑戦することは大切なことである。ピカソもその年代年代で作風が変わる時には何らかの契機があった。63回展を終え新しい資格に昇格した方も多いことと思う。これを機に特別研究科に挑戦してみてはどうだろうか。今日は93点（漢23、か16、現28、前23、篆3）特別研究科も新しい規格を設けることになった。創作に比べて臨書は樂に取り組めるようだ。絶えず努力して出品することにより次のステップを踏むことができる。

◆字を読まなくても詩情が伝つてくる絵のような作品です。行頭の他は小さな字での一行は揺るぎなく、左右の余白を制して美しい。  
◆左右の広い余白が眼に沁みるような印象的な作。書き出し一字の極端に大きな字にやや違和感を覚えるが、軽妙なリズムに詩情を感じます。

（明子評） 情が伝つては揺るぎないで美しく、詩情を運和感を賞出し一字のに沁みるよ。

漢	大	か	さ	さ	さ	さ	さ
墨宣	大雲	卯月	書泉	如月	もく	一葉	東葉
中山	佐藤	前田	坂口	治田	森田	小野原	三浦
無硯	希雲	まさ美	とし子	芳江	藤谷	紅華	白柳
						鄭街	現
調布	蓮紅	蓮紅	青蓮	眩耀	恵雅	炎佳	翠苑
下畠	大友	一條	西塚	佐々木青霞	板橋	佐藤	氏家
紅蕙	紅薺	紅蕭	遥	華炎	雅邦	久光	



180×61cm

總評

荒川空華書



平野笛舟書

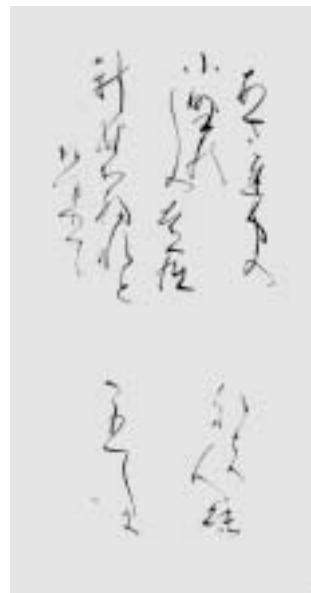
167×46cm

**現代詩文書** (千華) 平野笛舟  
「菅笠の…」子規の歌

◆一行末から二行めに移るときの筆致の変化は美しい。異った筆によるかと思わせられる。巧みな字形で素晴らしいが、しつとり感も欲しい？  
(明子評)

◆二本筆による破筆の効果を生かし、動きある作品。右行の落ち着いたリズムに対し左行の大膽な運筆が変化を感じさせるがやや不調和か。  
(大雲評)

かな (書泉)  
田村玲子  
「浅茅生の…」



田村玲子書

135×70cm



大隅晃弘書

70×135cm

**漢字** (大雲) 大隅晃弘  
「絶句」

◆左右の潤渴で立体感を見せているがあまりにも行が直線的すぎるよう感じた。二行目の渴の中にもしっかりとした黒がほしい。  
(蒼玄評)

◆濃墨を筆に含ませるのが計算されたようになかすれを表現、筆先きの廻転も全体の動きが乗っているので線が生き生きとしているのでは。  
(大雲評)

◆洒落た表現で空間に文字が舞う。展覧会作品のような強さはないがこれが本来の書作品の楽しみ方ではないか。益々の活躍を。  
(蒼玄評)

◆確かな作品を安心して見せていただけ幸せを感じました。襟を正す思いです。行の中心の通り方に感動です。多様な表現力は深くて魅力的です。  
(明子評)

◆周到であり、力が入りすぎていい所には好感を持ちました。煩雑になりがちな構成を思い切り余白をとり淡々と運筆した抑制力が見事です。(明子評)

◆線もよし空間の構成も抜群。だが、少しうるさい気もする。単純な表現停止の部分があればさらに空間に響くのでは。  
(蒼玄評)

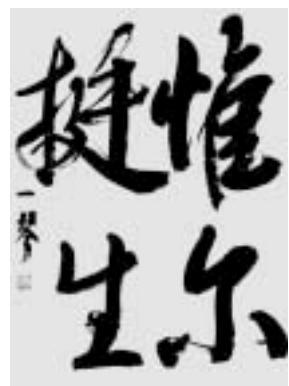
◆周到であり、力が入りすぎていい所には好感を持ちました。煩雑になりがちな構成を思い切り余白をとり淡々と運筆した抑制力が見事です。(明子評)

◆線もよし空間の構成も抜群。だが、少しうるさい気もする。単純な表現停止の部分があればさらに空間に響くのでは。  
(蒼玄評)

◆上下二段構成に斬新さを感じる。上部の混み具合が下部の広い余白と対照して紙面に動きと広がりを与えている。さらなる工夫発展を望む。  
(大雲評)

選評 小浜 大明

今月のホープ作品



中村一琴

漢字研究部 特選 中村一琴

もう一步進めて、筆路等を良く理解してから書いてもらいたいと感じる作品も少なくなかつた。例えば、「行目の「惟」の筆が一

祭姪文稿の用筆をよく理解し正確に臨書した秀作である。筆先が紙面に食い込むが如くの強く深い線が魅力を感じさせる。正に顔真卿の明快にして厚味のある線を見事に表現できている。

◎漢字研究部總評

数多い力作に接し、皆さんの熱心な研究姿勢に敬服させられた。しかし、その姿勢を

画省略されたもの、縦画の筆順が間違っている作品などがかなりあって残念だった。不明な点は字典等を使い調べてから臨書したいものだ。全般的には良い作品が多く見られてよかつたと思う。



千空小雅抱桂  
代子華秋美遊苑

秀萩和卿成湖  
皋光子舟美舟

紫紅洋白初  
翠華子景江子

裕慶紫智石美  
侑子燁泉子歩千